

紀友則の死を読み解く——紀貫之がほのめかす死——

桜井宏徳
清水咲希

一 貫之「ことなつはいかがなきけん時鳥こよひばかり

はあらじとぞきく」詠

給ふにたてまつる

ことなつはいかがなきけん時鳥ほととぎすこよひばかりはあらじとぞきく（おもふ

—西

（巻九・八一九）²

『貫之集』所収の次の歌とその詞書は、夙に藤原清輔が『袋草紙』（故撰集子細）において着目していたように、「古今集の成立事情を語る資料」として広く知られている。

延喜御時、やまとうたしれる人（人々—西・天）をめして、むかし今（いまむかし—西）の人のうた（うたども—天）たてまつらせ給ひしに、承香殿のひんがしなる所にて歌（歌—歌・御により補う）えらせ給ふ、よの更くるまで（はじめの日よりくるまで—西／はじめの日よのふくるまで天）とかういふほどに（あひだに—西・天）、仁寿殿のもの（御前の—西／このそぎやうでんのもの—御）桜の木に時鳥のなくをきこしめして（ききて人々うたよむ。みかどもきこしめして—天、四月六日（二日—御）のよなりければ、めづらしがりをかしがらせ（けふせさせ—御／けうじ—天）給ひて、めし出でてよませ

詞書には異同がやや目立つものの、文意に大異はなく、歌それじたいの異同も、西本願寺本が結句を「あらじとぞおもふ」としている程度で、歌意に大きく関わるような異同は見られない。なお、『大鏡』（太政大臣道長）（雑々物語）『袋草紙』（故撰集子細）では、下句が「このくればかりあやしきぞなし」とされているが、これは後発的な本文とらしく、村瀬敏夫氏が指摘するように³、『貫之集』にもとづいて書かれたのではなく、名歌にまつわる当時の伝承によつたのだろう」と見るのが穏当であろう。また、この歌のちに『風雅集』に入集しており、『風雅集』には第二句を「いかがききけん」とする伝本（宮内庁書陵部蔵飛鳥井雅章筆本）も存するが、⁴「いかがききけん」と「あらじとぞきく」

との重複はいかにも不自然であり、「な」と「き」との誤写に由来するものと推察される。

叙上のように、本文異同についてはさほど大きな問題は見られず、第二句を「いかなきけん」、下句を「こよひばかりはあらじとぞきく」とする『貫之集』（西本願寺本を除く）の本文が、本来の歌形を示していると見て大過ないであろう。

近く神田龍身氏が述べているように⁽⁵⁾、この貫之歌において何よりも重要なのは、これが『古今集』編纂時の雰囲気を今に伝える歌であるという点であり、その意味では、「延喜何年のことか様々議論があるが、ここでは勅撰事業に携わる撰者たちの熱気と興奮とが確認できれば十分である」ともいえようが、本稿では、以下の二点に着目してこの歌の示唆するところについて、いま少し深く掘り下げて考察を試みたい。

まず一点目は、詞書から知られるように、「やまとうたしれる人」——『古今集』撰者たちが集って撰修作業に従事していた折に、醍醐天皇が「めし出でて」歌を詠ませたのが、撰者の筆頭格であったと目される友則ではなく、貫之であったということである。天皇はなぜ貫之を召し出して歌を詠ませたのか、という点に注目すれば、この場に友則が居合わせていなかった蓋然性が高いことに想到せざるをえないであろう。

いま一点は、貫之の歌に詠み込まれているホトトギスが、『万葉集』の時代からその声を賞美され、夏歌にきわめて多く詠まれる⁽⁶⁾。歌材で

ある一方、「死出の山との間を往復する鳥⁽⁷⁾」のイメージをも有していることである。詞書にいう「めづらしがりをかしがらせ給ひて」という醍醐天皇の感興については、「春の風物である桜の木で郭公が鳴くことに興趣を覚えたのであろう⁽⁸⁾」と考えるのが至当であると思われるが、ホトトギスにまつわる死と異界のイメージを念頭に置いてみれば、不在の友則に代わってこの歌を詠じたのであろう貫之が、その鳴き声に「こよひばかりはあらじ」という深い感慨を禁じえなかったのも、必ずしも「この編纂事業に張りつめた気持ちで臨み、そのことを誇りとしていた⁽⁹⁾」ことのみが理由ではないように思われてこよう。

貫之が当該歌を詠んだとき、友則はすでにこの世の人ではなかったのではないか——。本稿は、右の二点を傍証として、そのような仮説を提示しようとするものである。なお、友則の死をめぐる諸説にも論述の過程で必要に応じて言及するが、本稿の眼目はあくまでも貫之歌の解釈にあり、友則の死の時期の特定を試みるものではないことを、あらかじめお断りしておく。

二 友則の不在と貫之への下命

醍醐天皇の下命に応じて「ことなつは」詠を奉ったのが友則ではなく貫之であったことは、前述のように友則の不在を示唆するものと思量されるが、このことについては、早く村瀬敏夫氏が注目している。村瀬氏は、筆頭撰者として歌を詠進するにふさわしい立場にあった友則の名がここに見えないのは、彼がその場に居合わせていなかったか

らであり、それゆえに貫之が撰者を代表して詠進することになったのであろう、とした推測した上で、友則の不在の理由については、すでに病身であったため、深夜に及ぶ撰修作業に堪えられずに退席した、あるいは大内記の職掌のために中座した、という二つの可能性を想定している。

本稿の見通しは、村瀬氏が提示した二つの可能性のうち、前者に近いが、後者の職掌を理由とする不在は、いささか考えにくいのではあるまいか。これに関しては、山口博氏も、撰修の場であった「承香殿のひんがしなる所」が貫之の職掌である御書所預と関わりが深いのに対して、友則の大内記とは無縁であること、また、貫之と藤原時平との関係の深さなどを論拠として、友則よりも貫之が重んじられていた可能性を指摘しているが、^⑩そもそも撰者らの本官と撰修の場である「承香殿のひんがしなる所」、そして撰修作業そのものは、直接に関係するものではない。筆頭撰者という立場にありながら、肝心の撰修作業を欠席ないしは中座して「よの更くるまで」精勤しなければならぬほど、大内記が激職であったとも考えにくい。やはり友則の不在は、彼自身の病臥あるいは死去によるものと見ておくのが自然であろう。

なお、村瀬氏は、底本（陽明文庫本）の「よの更くるまで」の箇所について、天理本の「はじめの、日よのふくるまで」という本文を最も信頼すべきものとして、「四月六日」は、「承香殿の東なる所」に撰修場所を与えられて、後詔による作業が開始された日であるから、それは延喜四年のこととなる^⑪と論じているが、『貫之集』の主要伝本は「は

じめの日」を持つもの（第一類^②—西本願寺本、第二類—天理本）と持たないもの（第一類^①—歌仙家集本・陽明文庫本、^③御所本）とに分かれており、「どの伝本を取り上げてみても、満身創痍といったありさま^⑬といわれる『貫之集』の本文の複雑さに照らしても、「はじめの日」を持つ本文の方がより本来的で信頼しうるとは速断しがたい。

むしろ、諸本が一致して「延喜御時」とし、延喜何年のことであるかを明示していないことから推察されるように、少なくとも『貫之集』には、これを「後詔による作業が開始された日」の記憶すべき出来事として、年月日とともに記しとどめようとする意図はなかったと見るべきであろう。詞書からも、この貫之歌は撰修作業の開始を記念して詠まれたものではなく、折からのホトトギスの初音に興じた醍醐天皇の求めに応じて詠まれた即興歌であったものと判断される。古く『袋草紙』（『故撰集子細』）が「四月十八日」の誤写と解し、『古今集』仮名序に記された「延喜五年四月十八日」を奉勅の日とみなす説の論拠とした「四月六日」という日付にしても、村瀬氏がいうように、「四月六日」という日は特別な日とは思えないので、これは時鳥の初音を四月六日に聞き得た珍しさを述べたもの^⑭に過ぎないのであろう。本稿では慎重を期して、この「四月六日」については、「延喜二年から四年ごろのある年の四月六日^⑮」とゆるやかに捉えておきたい。

友則の死を伝える文献は乏しく、『古今集』所載の貫之と壬生忠岑の哀傷歌、

きのとものりが身まかりにける時よめる

つらゆき

あすしらぬわが身とおもへどくれぬまのけふは人こそかなしかりけれ

（古今・哀傷・八三八）

ただみね

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだにこひしきものを

（古今・哀傷・八三九）

が、ほぼ唯一の同時代資料であるが、年次の記載はなく、忠岑歌によって某年秋に死去したことがわずかに知られるのみである。

後代の文献では、毘沙門堂本『古今集注』をはじめ、中世のいくつかの『古今集』注釈書が友則の没年を延喜五年（九〇五）としている（日付は八月十八日・九月一日・九月十日など諸説あり）ことが注目されるが、その根拠は明らかではなく、全面的には信を置きたい。奥村恒哉氏・山口博氏は、『古今和歌集目録』が藤原敏行の没年を延喜七年（九〇七）または昌泰四年（九〇二）としていること、友則が敏行の哀傷歌（古今・哀傷・八三三）を詠んでいることから、友則の死を延喜七年（九〇七）のことと推定しているが、『古今和歌集目録』によれば「家伝」を典拠とするという昌泰四年（九〇二）年説を排除すべき理由は必ずしも明確ではなく、やはり従いがたい。

また、『古今集』に「内侍のかみ（＝藤原満子）の右大将ふぢはらの朝臣（＝藤原定国）の四十賀しける時に、四季のゑかけけるうしろの屏風

にかきたりけるうた」の詞書のもと、他の六首とともに入集している、

めづらしきこゑならなくに郭公こころの年をあかずもあるかな

（賀・三五九）

は、『友則集』にも「大将の四十賀の屏風のうた」（九）の詞書を付して収められていることから、友則歌とみなされることが多く、定国の四十賀が催された延喜五年（九〇五）二月の時点で友則が存命であったことを証する資料としてしばしば取り上げられる。しかし、『古今集』の多くの伝本では、この一連の屏風歌群は作者名を欠いており、『古今集』や『後撰集』の友則歌を中心に収集されたもの¹⁹⁾とされる『友則集』の詞書から逆に『古今集』歌の作者を比定するという手続きには無理があろう。

結局のところ、現行の主な『古今集』注釈書の間でも、たとえば、「完成以前に没したとみられる」とするものもあれば、「延喜五、六年（九〇五、六）頃没か²¹⁾とするものもある、といった具合に、友則の死の時期をめぐる意見は分かれており、「友則の没年についての信頼すべき記録はない」という結論に至らざるをえないのが現状である。

前述のごとく、本稿は友則の没年を特定することを目的とはしていないが、ここでは、前掲の「ことなつは」詠を奉った場に、撰者を代表して醍醐天皇の下令に応じるべき立場にあったはずの友則の姿が見られないことは、この時点で友則がすでに他界していた可能性を示唆

しているのではないか、という見通しをまずは示しておきたい。もとより仮説の域を出るものではないが、この仮説は、以下に述べてゆくように、友則の不在に加えて、貫之歌に詠み込まれた「時鳥」の表現性を考え合わせることによって、さらに補強しうるであろう。

三 「時鳥」の二面性

貫之歌「ことなつはいかがなきけん」は、『新潮日本古典集成』の口語訳のように、

いったいこれまでの夏には時鳥がどのように鳴いたのであろうか。
今宵ぐらいいすばらしい時鳥の声はあるまいと思って、聞いた。⁽²³⁾

と解するのが妥当であるが、この歌でとりわけ注目されるのは、「ことなつはいかがなきけん」「こよひばかりはあらじ」と、今年の夏の「こよひ」という時期が「ことなつ」との対比のもとにクローズアップされ、「こよひ」なればこそホトトギスの鳴き声もひときわ感慨深く感じられたのだ、と詠われている点である。この夏の「こよひ」のホトトギスの鳴き声は、なぜ「ことなつ」とはまったく異なって聞こえたのか、その理由については、従来の研究史では、詞書を根拠として、「こよひ」がまさに貫之ら撰者たちが『古今集』の撰修作業に携わっている折であったからである、と考えられてきた。

そのことはひとまず首肯されるが、既述のように、この場における

友則の不在がその死を示唆しているとも考えうることに、ホトトギスがこの世とあの世とを往還する鳥というイメージを抱かれていたことを考え合わせると、これまでの解釈は、当該歌に込められた貫之の真意を充分には汲み取りきれないようにも思われてくるのである。いうまでもなく、古典和歌におけるホトトギスは夏の訪れを告げる景物であり、「ことなつは」詠にしても、「四月六日のよなりければ」という詞書の記述が示しているように、あくまでも貫之が主眼を置いているのはホトトギスの初音に対する賞美である。

だが、鳴き声を賞美される夏の鳥と、現世と冥界とを行き来する異能の鳥という、ホトトギスをめぐる相異なる二つのイメージは、決して無関係であったわけではない。このことについて、渡辺秀夫氏は、「夏季（きつげ）の到来を報しらせるほととぎす」が、一方では「ひたすら夜のしじまや物陰に忍び隠れるものとしてとらえられ」、「その景物としての形象の根拠は、いわば現世を越えた向こう側の世界にあり、その未知幽冥の彼方からの重く暗い深刻な予兆・余韻がほととぎすの姿を借りてこの世へと刻印される、といった体のもの」であったことを、『枕草子』などを参照しながら詳細に論じており、示唆に富む。これを敷衍すれば、もっぱらホトトギスの初音を賞美することに終始しているかに見える貫之の「ことなつは」詠においてさえ、そこに詠み込まれた「時鳥」は、「未知幽冥の彼方からの重く暗い深刻な予兆・余韻」を揺曳している、と見ることもできよう。

高桑枝実子氏によれば、『万葉集』にはホトトギスを「冥途の鳥」、

もしくは他界から通い来る鳥として詠んだと認め得る確かな例は無²⁶⁾く、それは中古以降の和歌世界において定着した観念であるという。その初期の例としては、

題しらず

よみ人しらず

なき人のやどにかよはば郭公かけてねにのみなくとつげなむ

（古今・哀傷・八五五）

うみたてまつりたりけるみこのなくなりての又のとし、郭公をききて

伊勢

しでの山こえてきつらん郭公こひしき人のうへかたらなん

（拾遺・哀傷・一三〇七）

などが挙げられるが、貫之自身も「ことなつは」詠に先立つ寛平六年（八九四）の夏、

藤原たかつねの朝臣の身まかりての又のとしの夏、ほととぎすのなきけるをききてよめる

つらゆき

郭公けさなくこゑにおどろけば君を別れし時にぞありける

（古今・哀傷・八四九）

と詠じており、これも「冥途の鳥」としてのホトトギスを詠んだ比較

的早い作例としてしばしば取り上げられる。

右の藤原高経の死を悼む貫之の哀傷歌について、藤岡忠美氏は「ほととぎすの鳴き声が夏の季節の表象であり、それが悲しい思い出を呼び起こしている」と評しているが²⁷⁾、夏と死というホトトギスにまつわる二つのイメージを一首のうちに融合させた、このような作例が貫之にあることは、「ことなつは」詠における「時鳥」の含意を考える上で示唆的である。この高経哀傷歌は、貫之が「ことなつは」詠に先立つて、ホトトギスの鳴き声が故人を想起させるものであることを、単に観念としてではなく、実感として熟知していたことを証しているよう。

また、神田龍身氏は、高経哀傷歌と「ことなつは」詠、さらに、

（寛平御時きさいの宮の歌合のうた）

きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしのめ

（古今・夏・一五六）

山に郭公のなきけるをききてよめる

つらゆき

郭公人まつ山になくなれば我うちつけにこひまさりけり

（古今・夏・一六二）

の計四首を例示しつつ、貫之のホトトギスの歌は、「どれも時鳥の鳴き声が瞬時にして世界を変容させるという歌となつて」おり、「他の歌人たちの時鳥歌とは一線を画する」と看破しているが、この指摘もきわ

めて重要である。「ことなつは」詠の趣意は、折からのホトトギスの鳴き声によって、「ことなつ」と今年の夏の「こよひ」とでは世界が一変していることにあらためて気づかされた、という点にあるものと思われるが、ここでいう世界の変容とは、通説のように、不遇を託っていた卑官の歌人たちが一躍勅撰集の撰修という榮譽に浴したことをのみを指していると解してよいのであろうか。

前出の渡辺秀夫氏が説いていたように、夏の到来を告げるホトトギスの鳴き声にも「未知幽冥の彼方からの重く深い深刻な予兆・余韻」を看取しうるのであれば、ここで貫之はホトトギスの鳴き声に託して、彼らとともに『古今集』撰修の作業に携わるはずであった友則の死を境として、世界がそれ以前とは一変してしまったことの悲しみをも暗に詠み込んでいるのだ、とも解しえよう。

前述のように、この歌は折からのホトトギスの初音に興じた醍醐天皇の下命に応じて詠まれた即興歌である。夏の到来を告げる鳥であるホトトギスが、春の花である桜の木で初音を響かせていることに興趣を覚えた天皇の意を迎えつつも、「冥途の鳥」という死のイメージをも併せ持つホトトギスの鳴き声に接した貫之は、思わず在りし日の友則の面影を想起し、彼を追慕せずにはいられなかったのであろう。貫之は天皇の期待に見事に応えながら、この前年に——「ことなつ」と「こよひ」の対比からは、そのように読むことができよう——友則を喪った悲しみと追慕の思いをホトトギスに託して詠み込むことによって、ひそかに友則を悼んでいたのである。

神田龍身氏は、「貫之が多くの哀傷歌を詠むにいたった文学論的意味」を、「愛する者の死に遭遇し、その人は存在しないということ」に求めている。『古今集』の撰修作業に「よの更くるまで」没入して取り組む貫之らのもとに、彼らの代表であった友則はもはや存在しない——。折しも耳に届いた「冥途の鳥」である「時鳥」の初音は、そのことをあらためて貫之に痛感させたのではなかったか。そのように考えれば、友則の不在こそが、貫之に「こよひばかりはあらじ」という深く痛切な感慨を催させたのだ、ということもできよう。「ことなつは」詠は、『古今集』編纂時の雰囲気而今に伝える歌であると同時に、貫之による秘められた友則哀傷歌でもあったのである。

四 「ことなつは」詠の背景——貫之の対友則意識——

本稿では、貫之の「ことなつは」詠が、単に『古今集』撰修という榮譽に浴した撰者たちの喜びと誇りとを伝えているのみならず、すでにこの世を去っていた友則をあらためて悼む思いをも詠み込んだひそかな哀傷歌でもある可能性について、詠歌の場における友則の不在と、ホトトギスの持つ「冥途の鳥」のイメージとに着目して論じてきた。最後に、この「ことなつは」詠の背景として、貫之の友則に対する思い——対友則意識とでもいうべきものについて、いささか言及しておきたい。

貫之と友則の関係をめぐっては、従兄弟であること、『是貞親王家歌合』『寛平御時后宮歌合』に揃って出詠していること、ともに『古今集』

撰者であったこと、等々の外面的な事実から、浅からぬ交わりがあったであろうことは容易に推察され、貫之の歌壇への登場を、藤原敏行とともに友則の推輓によるものとする村瀬敏夫氏の推論も首肯されるが、両者の直接的な交友関係を示す資料は意想外に少ない。『友則集』には貫之の名さえ見えず、九〇〇余首を取める『貫之集』においてさえ、たとえば、同じ『古今集』撰者の躬恒との贈答歌は多く見られるにもかかわらず、友則の名は、前掲のごとく『古今集』にも入集している以下の哀傷歌の詞書に見えるのみである。

きのともりのりうせたる時によめる

あすしらぬ命なれども（わがみとおもへど―西御）暮れぬまのけふは（けふこそ―御）人こそ（人は―御）哀なりけれ（こひしかりけれ―西・御）

（巻八・七六八）

基幹は自撰とされる貫之の家集に収められた友則に関わる歌が、右の哀傷歌一首のみであるという事実は、かえって貫之の友則への思いが並々ならぬものであったことを証し立てているようにも思われる。この歌の異同の多さについて、田中登氏は「作者の貫之自身が推敲を重ねた結果、次々と改訂したとする可能性もなしとすまい」と述べているが、友則の死という一回的な出来事に逢着して詠まれた哀傷歌に後々まで手を加え続けることじたい、異例のことであろう。仮に田中氏の推測が当を得ているとすれば、貫之にとってこの歌は、哀傷歌本

来の一回性や実感性に反してでも、より望ましい歌形を模索し続ける必要を感じるほどの重みを持つていたということになろう。

もつとも、この「あすしらぬ」詠をめぐるのは、「命のある今日は、せめて友の死を心ゆくまで悼んでいたい、という作者の悲痛な想い」を看取する向きもある一方で、「友則その人を痛切に悼むよりも、その死につけて人の生命のはかなさに思いを致した様な一種の余裕が感じられないでもない」⁽²⁰⁾、「なんとという悠長な述懐ぶりか」⁽²¹⁾なども評されるように、友則の死に接した悲嘆や衝撃を、必ずしも率直に表現しているとはいいがたい。むしろ、大岡信氏が指摘するように、「人間の死を、時間の流れの中に位置づけ、対象化し、一般化」しようとする志向が、そこには確かに認められる。このことについての、「これは友則が貫之にとって、ある距離を置いて眺められる先輩だったことによるのではあるまいか」という日崎徳衛氏の推測は、友則が貫之よりも十数歳ほど年長であったとみられることから首肯されるが、むしろそのことは、貫之と友則との関係が疎遠であったことを意味しているわけではない。

藤岡忠美氏が「言葉の技巧にかたよらず、季節の景物を借りて心情を述べ、耽美的な余情を重んじている作風は、先達として貫之に強い影響を与えたにちがいない」と述べているように、友則は同族の従兄として貫之を庇護し、新進気鋭の若手歌人として頭角を現す機会を与えたばかりでなく、その歌人的形成にも大きく寄与していたものと思しい。藤岡氏は、同じ『是忠親王家歌合』に出詠された貫之と友則の歌、

秋のよに雁かもなきてわたるなりわが思ふ人の事づてやせし

(後撰・秋下・三五六 貫之)

秋風にはつかりがねぞきこゆなるたがたまづさをかけてきつらむ

(古今・秋上・二〇七 友則)

を比較し、その発想が酷似していることを指摘した上で、貫之歌の「わが思ふ人の」という「単刀直入の主情的表現」に比して、友則歌の「たがたまづさを」という「疑問詞を用いた間接的な言い回し」に「言葉のあやによる余裕・余情」の優位性を認め、「まるで貫之歌を添削修正したものが友則歌であるかのよう」と評しているが、これなどは、初期の貫之が友則に倣い、その歌風を範と仰ぎながら歌人として始発していたことを証する好例といえよう。後年に至っても、

さ月山こずゑをたかみ郭公なくねそらなるこひもするかな

(古今・恋二・五七九 貫之)

について、神田龍身氏が、

おとは山けさこえくれば郭公こずゑはるかに今ぞなくなる

(古今・夏・一四二 友則)

が参考とされているであろうことを指摘しているように、友則は貫之に影響を及ぼし続けている。

また、吉原栄徳氏が、『古今集』における撰者四名の歌枕・枕詞・序詞・掛詞の使用比率を、橋本不美男氏・久保木哲夫氏・杉谷寿郎氏作成の「古今和歌集技法一覽」⁽³⁴⁾によって比較しつつ、歌枕を除く三項目で「友則と貫之の近似が目立つ」ことに着目して、「(引用者注・貫之は)友則の歌に倣いながら自己の歌風を高め確立していったのである」と論じているように⁽³⁵⁾、貫之と友則の歌風の近似性は、数値によってもある程度跡づけることが可能である。

渡辺秀夫氏の「やがて言語の自立的な可能性を歌ことばの中に鋭く追求してゆく貫之によって自覚的に整備される延喜の新風前後の寛平期における歌のゆくえを、穏正、トータルに達成していたのが友則であった」という的確な評もあるように⁽³⁶⁾、貫之の歌風は、友則のそれを発展的に継承していった先に完成されたもの、と位置づけることもできよう。貫之は、歌人としての社会的な始発に際しても、またみずからの歌風の確立においても、友則に多くを負っていたのであり、前出の吉原氏がいうように、貫之にとつての友則とは、「敬慕すべき存在であると同時に、凌駕することによって恩返しをせねばならない存在」であったのだと考えられる。

そのような存在であった友則の死が、貫之に大きな衝撃と悲嘆、そして喪失感をもたらしたであろうことは想像に難くない。友則の死によって、はからずも『古今集』筆頭撰者の重責を引き継ぐことになっ

た翌年の夏、深更に及んだ撰修作業の折に耳にしたホトトギスの初音に抱いた感慨は、貫之と醍醐天皇とは必然的に異なるものであつたらう。従来の解釈は、もっぱら天皇の感興と、『古今集』撰者としての貫之の感激とにのみ視点を据えてきたが、ホトトギスが「冥途の鳥」のイメージを負っていることに着目すれば、敬愛する年長の従兄である友則への追悼の念を禁じえなかつた、一人の人間としての貫之の思いを「ことなつは」詠から読み取ることも可能となる。ホトトギスの声は、貫之に今は亡き友則を想起させずにはおかなかつたのである。また、奇しくも友則自身も、前掲の「おとは山」詠をはじめ、

五月雨に物思ひをれば郭公夜ぶかくなきていづちゆくらむ

(古今・夏・一五三)

夜やくらき道やまとへるとぎすわがやどをしもすぎがてにな

(古今・夏・一五四)

などの秀歌を残したホトトギス詠の名手であつた。この点、ホトトギスは貫之にとつて、二重の意味で友則を偲ぶよすがとなるものであつたのかもしれない。

醍醐天皇は「桜の木に時鳥のなく」という取り合わせを「めづらしがりをかしがらせ」て貫之に詠進を命じ、貫之はその期待に応えて「ことなつは」詠を奉つたが、その一方で、ホトトギスの初音を耳にして、

友則を偲ばずにはいられなかつたのである。それゆえに「ことなつは」詠は、ホトトギスへの賞美を前面に押し出ししながら、友則を静かに追慕するさり気ない哀傷歌ともいふべきものになりえたのであつた。

注

- (1) 田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』(私家集全釈叢書)(風間書房、一九九七年)。田中喜美春・平沢竜介・菊地靖彦『貫之集 躬恒集 友則集 忠岑集』(和歌文学大系)(明治書院、一九九七年)。「貫之集」は田中氏担当)にも同様の指摘がある。
- (2) 『貫之集』の引用は、陽明文庫本を底本とする、田中登編『校訂 貫之集』(和泉書院、一九八七年)に拠つたが、詞書の読点の位置は適宜私に改めた。異同の確認は、『校訂 貫之集』の頭注欄と、田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』(注(1))の異同欄に拠るが、軽微な異同は掲出を省略した。
- (3) 村瀬敏夫『紀貫之伝の研究』(桜楓社、一九八一年)。以下、村瀬氏の所説はすべてこれによる。
- (4) 『風雅集』の異同の確認は、岩佐美代子『風雅和歌集全注釈』上(笠間書院、二〇〇二年)の校異欄に拠る。
- (5) 神田龍身『紀貫之——あるかなきかの世にこそありけれ』(ミネルヴァ日本評伝選)(ミネルヴァ書房、二〇〇九年)。以下、神田氏の所説はすべてこれによる。
- (6) 福留温子「郭公『ほととぎす』」(久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、一九九九年)。
- (7) 福留温子「郭公『ほととぎす』」(注(6))。
- (8) 田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』(注(1))。
- (9) 神田龍身『紀貫之——あるかなきかの世にこそありけれ』(注(5))。
- (10) 山口博『王朝歌壇の研究』(桜楓社、一九七三年)。以下、山口氏

の所説はすべてこれによる。

- (11) 田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』(注(1))、田中喜美春・平沢竜介・菊地靖彦『貫之集 躬恒集 友則集 忠岑集』(注(1))なども同様に解している。
- (12) 『貫之集』の諸本分類については、田中登編『校訂 貫之集』(注(2))『解説』の「貫之集諸本概要」に負う。
- (13) 田中登編『校訂 貫之集』(注(2))『解説』の「本書の校訂方針」。
- (14) 木村正中校注『土佐日記 貫之集』(新潮日本古典集成)(新潮社、一九八八年)。
- (15) 以下、勅撰集の引用は、『新編国歌大観』(古典ライブラリー「日本文学 Web 図書館」)に拠る。底本は、『古今和歌集』は伊達本『後撰和歌集』は日本大学総合図書館蔵冷泉為相筆本、『拾遺和歌集』は京都大学附属図書館蔵中院通茂筆本。
- (16) 奥村恒哉「勅撰宣下をめぐる諸問題——附、紀友則の歿年について——」(『古今集・後撰集の諸問題』風間書房、一九七一年。初出一九五一年)以下、単行本所収の論文で初出稿がある場合には、初出年を併記する。
- (17) 『友則集』の引用は、西本願寺本を底本とする、『新編私家集大成』(古典ライブラリー「日本文学 Web 図書館」)に拠る。
- (18) 久曾神昇『古今和歌集成立論 資料編』上(風間書房、一九六〇年)、西下経一・滝沢貞夫編『古今集校本』(笠間書院、一九七七年)によって検した限りでは、作者名「とものり」を持つのは私稿本・基俊本・雅俗山荘本のみ。永暦二年本・昭和切(ともに俊成本)は見せ消ちになっている。奥村恒哉「巻七右大将藤原朝臣の四十賀の屏風歌の作者について」(『古今集・後撰集の諸問題』(注(16))。初出一九五二年)は、一連の屏風歌群(三三七・六三三)の直前に配されている三五六番歌の作者が「そせい法し」であることに着目して、このことは、屏風歌を色紙形に清書した際の筆者が素性であることを示しているのではないかと、説き、徳原茂実「右大将定国四十賀をめぐって」(『古今和歌集の遠景』和泉書院、二〇〇五年。初出一九七八年)もこれを支持している。そうであるとす
- れば、「そせい法し」の名は三五六番歌では作者を、三三七・六三番歌では筆者をそれぞれ表していることになるが、はたしてそのような表記の仕方がありうるのであろうか。なお、群書類従本『素性法師集』は、卷末の「家集不見哥」に、この「めづらしき」詠を含む屏風歌群を収めているが、これは、三五六番歌の作者名「そせい法し」が、続く三三七・六三番の屏風歌群にも及ぶと判断してのことであろう。
- (19) 藤田洋治「友則集」(『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』古典ライブラリー、二〇一四年)。
- (20) 小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』(新日本古典文学大系)(岩波書店、一九八九年)「人名索引」。
- (21) 高田祐彦訳注『新版古今和歌集 現代語訳付き』(角川ソフィア文庫)(角川学芸出版、二〇〇九年)「作者略伝・作者別索引」。
- (22) 村瀬敏夫「紀貫之伝の研究」(注(3))。
- (23) 木村正中校注『土佐日記 貫之集』(注(14))。
- (24) 田中喜美春・田中恭子『貫之集全釈』(注(1))は、「こよひばかりはあらじ」を「鳴き声の聞きなし」と解し、下句を「今夜ほど趣きあることはなかつた」と鳴いているように聞くことだ」と口語訳しているが、ここではホトトギスがみずからの鳴き声を自賛していることになり、不自然であろう。
- (25) 渡辺秀夫「ほととぎす」(『詩歌の森——日本語のイメージ』大修館書店、一九九五年。初出一九九〇年)。
- (26) 高桑枝実子「ホトトギスと死者追慕の歌——万葉歌から中古哀傷歌へ——」(『万葉挽歌の表現——挽歌とは何か』笠間書院、二〇一六年。初出二〇〇八年)。高野瀬恵子「『死出の山路のほととぎす』考」(『国文学論考』三一、都留文科大文学部国語国文学会、一九九五年三月)にも、「ほととぎすが冥途に通うという考えは、おそらく平安時代の比較的早い時期に端を発し」た、という指摘がある。また、ホトトギスの異名「しでのたをさ」については、上丸(赤間)恵都子「しでのたをさ」の歌をめぐって——古代のホトトギス享受の側面——(『金沢大学国語国文』

- (27) 一三、金沢大学国語国文学会、一九八八年三月）に詳しい。
藤岡忠美『紀貫之——歌ことはを創る』（集英社、一九八五年。講談社学術文庫に収録、講談社、二〇〇五年）。以下、藤岡氏の所説はすべてこれによる。
- (28) 田中登『紀貫之』（コレクシヨン日本歌人選）（笠間書院、二〇一一年）。
- (29) 田中登『紀貫之』（注（28））。
- (30) 日崎徳衛『紀貫之』（人物叢書）（吉川弘文館、一九六一年。新装版、一九八五年）。
- (31) 大岡信『紀貫之』（日本詩人選）（筑摩書房、一九七一年。ちくま文庫に収録、筑摩書房、一九八九年）。
- (32) 大岡信『紀貫之』（注（31））。
- (33) 日崎徳衛『紀貫之』（注（30））。
- (34) 橋本不美男・久保木哲夫・杉谷寿郎「古今集の表現と方法——付 古今和歌集技法一覽——」（『国文学 解釈と鑑賞』三五―二、至文堂、一九七〇年三月）。
- (35) 吉原栄徳『古今集』における貫之の方法——友則をめぐる——」（『園田学園女子大学論文集』一七、園田学園女子大学、一九八二年二月）。
- (36) 渡辺秀夫「友則」（古今和歌集の歌人たち）（『一冊の講座』編集部編『一冊の講座 古今和歌集』有精堂出版、一九八七年）。

付記

本稿は、二〇一七年度後期の成蹊教養カリキュラムの授業「文学への招待（1）」における清水の着想に基づき、清水の意見を取り込みながら桜井が執筆したものである。また、構想の段階で貴重なご助言を賜った神田龍身氏に、記して厚く御礼申し上げます。